人権コラム　心、豊かに

◆ シールブームに隠されたモラルと人権

シールブーム再来の背景には、SNSで映えるタイプの登場やかつてシール遊びを楽しんだ親世代が懐かしむ「平成レトロブーム」などがあるようですが、デジタル化が進む中、友人とシールを直接交換する行為が「新鮮な遊び」として子どもに支持されていることが大きいようです。

ただ、入手が困難なシールを一部の大人が買い占め、フリマサイトなどで高額転売するケースが多発していること、いつ店頭に陳列されるかわからないシールを求め店舗内に長時間滞在するような売る側に対する迷惑行為など、モラルを問われるような状況も見受けられています。

子どもに限らず、「交換」という行為は単なる物のやり取りを超えた深い本能的・社会的な欲求に基づいており、シールブームがこれほど熱を帯びたのは、人間の根源にあるいくつかの欲求を刺激したものであると言われています。

そのひとつが「互酬性（ごしゅうせい）の原理」です。人間には「何かをもらったら返したい」という本能的な心理があります。そのうえで、交換が成立した瞬間には、相手との間に信頼関係が生まれ、シールという小さな物をやり取りすることで仲間意識が形成されます。

一方で、子どもの間では「価値の合わないシールを無理やり交換させる」、「特定のシールを持っていない子を仲間外れにする」といったトラブルが起きることもありますが、シール交換という空間が、相手の気持ちを想像することや相手の立場を尊重し対等な存在として認めることを学ぶ機会になっています。

貝殻・石・カードなど「小さな宝物」を媒介とした社会が存在してきた歴史を振り返ると、交換の心理が現代の子どもたちの間でシールという形で再燃しているのは、人間らしい自然な現象とも言えます。そして、お金で買う消費と違い、交換には必ず感謝の言葉が伴います。

自分の大切なものを手放し、相手の大切なものを受け取る。この痛みを伴う喜びが人間関係をより深いものにしていくようです。

「広報ひた」　令和８年５月号掲載